深川探索

富岡八幡宮
新年吉例「木遣り歌と刺叉（さすまた）乗り」

2011年の幕開けに当り，今回は，深川・富岡八幡宮の新年の吉例奉納行事「木遣り歌と刺叉乗り」を紹介します。この催しは，毎年，正月二日より七日の七草までの間に，富岡八幡宮の境内で保存会のメンバーにより挙行されているもので，今年も1月7日に予定されています。初詣がてら出掛けてみませんか。

「木遣り」は，元来，鳶が中心となり，建前，祭禮，婚礼，出初式などの儀式の歌として歌われてきたようです。新年の奉納木遣りは，音頭を出す木遣師（江戸時代から続く江戸町火消『江戸町火消二番組内千組』の組頭 山口政五郎氏－写真①）と受け声をする木遣師（富岡八幡保存会メンバー）で行なわれます。

膝まである半纏に帯をきゅっと締め，肉に食い込む細い股引をはき，黒足袋に草鞋の少々トウの立った兄さん方が十数人で永代橋通から参道をソロリソロリと登りながら歌う木遣りは実にカッコイイ迫力があります。（写真②）

出だしは「よお～えんや～りょお～～」と来る。これらの木遣りの哀調を帯びた曲調は，実に江戸前でイナセで江戸芸の至宝とも言えるものになっています。鳴り物（三味線，笛，太鼓）入りのお座敷唄とはちょっと格調の高さが違う。この迫力はひょっとして，（アッシが想像するに）遠くで木遣りの声が聞こえてくると，家で働いていた下町娘は外に飛び出して「もしや，あたしのあの可愛いお方が居やせんか」と胸をとどろかせながら必死に行列の兄さん方を目で追ったのでは・・とも思ったりもします。「江戸鳶木遣」は江戸の庶民が残した貴重な文化財として，東京都の無形文化財に指定されています。

続いて行なわれるのが「刺叉乗り」。

一般的に，新年の出初式などで多いのは「梯子乗り」ですが，ここ富岡八幡宮のは，超ウルトラ難易度の「刺叉乗り（写真③④）」です。江戸時代の町火消が，延焼を防止するため家屋の破壊道具として使っていた「刺叉（さすまた）」によじ登り，梯子乗りと同じような演技をします。高さ6メートルの柄の先にある尖ったU字型の金具を使って演技をするという梯子乗りよりも高度な技術が必要で，その危険性から明治時代に一度は途絶えてしまいましたが，山口さんが昭和63年に復活させたそうです。

写真①

写真②

写真③

写真④

その7　☆文・写真　小田 泰平
元編集担当